

◇未来へのねがいを

東日本大震災

4年 鈴川 もも凜

「地震だ！」先生のさけび声が聞こえ、私はつくえの下へかくれました。グラグラ、グラグラ、たてゆれ、横ゆれと長い時間ゆれていました。「死んじゃうよう。」「助けてえ。」みんなの声が聞こえ、私は、大きな声を出して泣いていました。2011年3月11日、午後2時46分。このとき私は、福島県伊達郡国見町にある小学校にいました。私は大泣きでパニックになってしまいました。ゆれが少しおさまり、校庭にひなんしました。見回すと、二宮金次郎のぞうもばらばらになり、たおれていました。家へ帰ると、げんかんのくつだなもたおれ、冷ぞう庫の中も飛び出していました。飼っていたウサギは、足をけがしておびえていました。ねこは、けがもなく無事でした。その日は電気もなく、水も出ない真っ暗の中で、私とお母さんとおじいちゃんの三人でラジオを聞きながら過ごしました。パトカーや救急車の音以外は何も聞こえなくて、とてもこわい夜でした。

次の日、ガスがつながっている、ひいおばあちゃんの家へ行くことになりました。ウサギは連れていけないので、「帰ってくるから、待っていてね。」と、約束して家においでしました。ひいおばあちゃんの家も電気や水は使えませんでした。ならんでくんできた水は、とても大切でした。夜ごはんは、ろうそくの光でおにぎりを食べました。い間で服を着たまま、いつでも外へにげられるように家族全員でかたまってねました。よ震のたびに目がさめて、げんかんへ走って行きました。

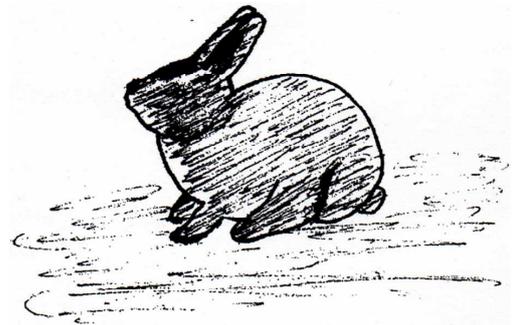
私は、おばちゃんと買い出しに行きました。スーパーも電気は消えていて、物もあまりありませんでした。水は売り切れで、おかしをやっと手に入れることができるほどでした。次の日もまた次の日も、電気もつかず寒かったので、日中は車の中で日にあたり、夜はふとんにくるまって過ごしました。おふろにも入れず、とてもいやな気持ちになりました。

5日後、やっと電気がつきました。家族で手をたたき喜びました。今まで当たり前にあると思っていた電気、水、ガスなどの大切さを知ることができました。

私は今、福島県からはなれ、愛知県弥富市に住んでいます。原発から私を守るために引っこしたのです。新しい友達もできたし、毎日楽しく生活しています。でも、地震の日から会っていない福島の友達のことを思い出すと、悲しくなります。ウサギとの約束も守れていません。一日も早く、安心して住めるようになった福島の家にもどりたいなと思います。あんなにこわい体験は二度とたくはありません。でも、あの地震があったから、今の友達や、たくさんの人たちに出会えたことは、とてもよかったです。

あの日のことはわすれられません。

(桜 小)



2011年4月、私ともも凜さんの初めの出会いでした。彼女は、その年の3月11日、東日本大震災で被災して大きく傷つき、小さな体で精一杯生きているという状態でした。あの日から、桜小で2年のときを大切に過ごしてきました。今ここにあるのは、大勢の友達に囲まれて、笑顔にあふれ、ひとまわり大きく成長したもも凜さんの姿です。だれに対しても温かい心で接する彼女が、ここ弥富に来て、遠く離れてしまった福島の友達やペットを想う心がこの作品に表れています。また最後に、ここでの幸せを前向きに捉え、さらに前へ進もうとしている力強さは、読者だけではなく、自分自身へのメッセージにもなっています。

(浅井 こと枝 先生)